

# 日本人の英語はなぜネイティブに通じないのか？

清水 英之

## 序文

筆者はもう三十年以上大学で英語教育に携わってきた。筆者の実践してきた授業で学生たちの評価が一番高かったのは、英語発音教育である。筆者の思いは、英語の発音教育など学習の初めに行うものであり、決して大学で学習するものではない、という遣る瀬ない気持ちである。しかし、このような中学生にこそ相応しい学習を大学生が大いに必要としているという現実を未だに経験している。

この論は、科学的な考察を行うものであり、読者は英語教育に携わっている筆者と同じ教員を対象と想定している。にもかかわらず、タイトルが「日本人の英語はなぜネイティブに通じないのか？」といかにも一般向けなのは、英語が苦手な妻の助言である。つまり、この論の目的は、如何にすれば英語を英語らしく発音できるのかという問題に対し、誰でもが納得のいくようになるべく科学的に考察し、改善のための提案をしていくことである。

筆者の今までの英語に関する考察からすれば、英語は日本語とまったく逆の特質をもつ真逆の言語である。英語は、日本語ができればできるほど英語との距離が遠ざかっていくという皮肉な結果になりかねない、日本人にとって一番難解な言語といえる。異文化コミュニケーションという観点から言えば、英語は現象的に起こりうる全くの「異文化言語」といえる。だからこそ、その違いを科学的に理解し、違いを体験的に学習することでしか習得することはできないであろう。文化人類学的見地からすれば、まさにフィールドワークという体験学習を通してしか研究の対象にならないような言語であろう。

この論では、日本語を母国語とする人が適切な理解と訓練により英語の発音を習得する学習方法を提案するものである。第1章では、英語のリズムについて考察する。なぜ英語にはリズムという現象が存在するのか、どうすればリズムを習得できるようになるのか、について議論をしていく。第2章では、英語のイントネーションについて考察す

る。英語は、イントネーション・ランゲージ (Intonation language) に分類されている。筆者のこれまでの考察の範囲では、日本人の英語音声学者でさえ、イントネーションという現象を日本語の現象からしか (自文化中心という意味で) 理解していないし、その重要性についてはあまりにも軽視しすぎていると思われる。ここでは、イントネーションの機能を理解し、なぜ英語にはイントネーションが必要なのかについて考察し、その重要性を強調するつもりである。

この論の議論を通して、英語の発音教育が義務教育である英語学習の初期段階に実践され、大学では研究のための手段として英語が使用されるよう徐々に英語教育が変化することを願っている。

## 第1章 英語のリズムについて

英語にはリズムがある。そのような知識は英語学習者なら誰でも知っているはずである。英語教師ならば、アクセントの有無、大きな声で発音する、など口をすっぱくして指導していることであろう。にもかかわらず、日本人は声が小さいし、いわゆるカタカナの発音の弊害によって英語のリズムは結果的に身に付かない。この章では、日本語にはない英語のリズムという現象を科学的に理解することに努め、日本語の発音とは違う英語の発音の特質を明らかにし、リズムを実践するための方法を提案していく。

### 1.1 アクセントのある母音の発音について

英語の単語学習で必ず指導されることは、英単語には発音上アクセントが存在するので、その位置を記憶することであろう。そのアクセントは、「強勢」と呼ばれ、それに注意を払って発音することが重要なのである。

この場合、「強勢」とは、ストレス・アクセント (stress accent) のことであり、それを「ストレス」とも呼んでいる。しかるに、英語ではストレスがおかれる部分の発音は、必ず「母音」である。だから、ストレスに注意を払って単語を発音するとは、ある母音に力を込めて (大きな声で) 発音するということである。

### 1.2 大きな声で母音を発音する方法について

英語の発音指導をするとき教師は、「大きな声で読みなさい」と指示を出したくなる。すると、生徒たちは、英文全体を大きな声で読んでくれる。英語を習いたての中学生たちは、これを見事に実践してくれることが多い。しかし、実際に要求すべきことは、ストレスのある母音を大きな声で発音することであり、そのように指示を出すべきである

う。これを実践するだけでも「大きな声で発音される母音」と「小さな声で発音される母音」との違いが明確になり、「リズム」らしき現象が生じるであろう。しかし、日本語の話者がこのような発音を繰り返していたら喉に負担がかかり声が枯れてしまうかもしれない。このような発音の方法は日本語の話者には不自然で面倒くさい行為であろう。この面倒くささが原因か分からないが、高校生になると誰も大きな声で発音しなくなる。高校での英語教育ではあまり発音をしなかった、というのが筆者が教えている学生たちの体験談である。

### 1.2.2 腹筋を使って母音を発音する方法

英語母国語話者（これ以降は「ネイティブ」と記す）は、日本語母国語話者（これ以降は「日本人」と記す）と比較すると声大きい。彼らは、日本人のように穏やかには話せないのではないだろうか。とにかく、通常は部屋中に聞こえる大きな声で話している。

この現象は、すでに明らかになっていることだが、ネイティブは腹筋を使ってストレスのある母音を強く発音している。腹筋を使うという行為は、腹筋に力を入れて息を「吐き出す」という行為であり、この方法だとストレスのある母音を発音し続けても面倒くさくなく不自然にはならない。

日本語の母音の発音は、腹筋に力を入れて発音する方法をとらない。しかし、英語の母音の発音は、腹筋に力を入れて「息を吐き出す」方法で発音する。この点に根本的な違いがある。それでは、なぜこの違いが生じるのだろうか。

### 1.2.3 腹式呼吸の必要性と声門閉鎖音

日本語の母音の発音は、「あいうえお」「かきくけこ」と発音するとき、個々の母音を明確に区切って発音する。また、「ka, ki, ku, ke, ko」とローマ字で表記すれば分かるように、「子音と母音」という組み合わせで発音する。このような母音の発音方法は、開音節語と呼ばれ、日本語がポリネシア諸語の仲間であることが分かる。ハワイ語で「アロハ」という発音と同類なのである。

このような開音節語で注目したいのは、「あ」「い」「う」と区切るときに、声門を閉じて息を止めている、ということである。この現象は、声門閉鎖音と呼ばれている。この声門閉鎖音は、英語では“glottal stop”と呼ばれ、子音の一種とみなされている。このように日本語の母音の発音は、ポリネシア諸語と同様に、個々の母音を区切るために声門閉鎖音が必要な言語なのである。

一方、英語では、声門閉鎖音はほとんど使われない。母音を発音するときの意識は、

強い息の吐き出しなのであって、腹筋の動きが必要なのである。英語では、個々の母音を声門閉鎖音で、つまり、声門を閉じて区切ることができないので、二重母音や三重母音という現象が生じる。“I”の発音は、「アイ」と区切ることがなく、息を吐き出す過程で「ア」から「イ」に変化させるのであって、息を吐き続けている。“Hour”の発音では、息を吐き続けながら「ア」「ウ」「ア」と変化させていく。これは、日本人には学習しなければならない未知の発音といえよう。

このような英語の母音の発音をするには、腹筋に力を入れて息を吐き出すことが必要であるが、それにともない自然に必要な呼吸法がでてくる。それは、腹式呼吸による息の吸い方である。腹筋に力を入れて、つまり、腹筋をじょじょに絞りながら息を吐いていくと、息を吸う時にしぼんだ腹筋が元に戻る。このように腹筋を縮めたり膨らませたりして横隔膜を上下動させる呼吸法を腹式呼吸という。英語では、この呼吸が自然な呼吸の方法であり、この呼吸法も日本人には学習しなければ身に付かないものである。

このように母音の発音方法でさえ、英語と日本語ではまったく違う方法で発音しているのである。

### 1.3 英語の子音の機能について

日本語の母音は、「ア」と発音した直後に声門を閉じて母音の発音を終了する。これが自然になっている日本人には英語の子音の発音が理解できていないことが多い。とくにこの誤解がカタカナ発音に表れている。“Book”という発音を「ブック」とカタカナ標記してしまい、これが正しい子音の発音の弊害になっているという認識が少ない。中学生向けの英和辞典には、わかりやすいようにという配慮であろうが、必ずカタカナ標記が付されている。これは、明らかに弊害であり、国民的な誤解を招く結果となっている。カタカナ標記で英語の子音の機能を表わすのは通常では無理であるとはっきり断言すべきであり、不明確にすべきではない。

英語の子音 (consonants) の機能は「呼気を止める (stopping)」ことであり、部分的に呼気を止めたり、完全に呼気を止めるために存在している。ゆえに、“good”は“d”で呼気を止めて、母音の発音を終了させるために必要なのである。“Morning”は“g”で呼気を止めて、母音の発音を終了させるのである。結果として、“Good morning”は「グッド モーニング」ではなく「グッ モーニン」という発音になるし、この発音に限ってなぜか皆そう発音している。“Book”は“k”で呼気を止めるから、「ブック」ではなく「ブッ」という発音になる。

このように、英語の子音の機能を正しく理解することにより、英語の自然な発音が可能になる。その英語では自然な子音の発音を妨げているのは、日本語では自然な現象で

ある声門閉鎖音の存在であることが理解されたのではないだろうか。

#### 1.4 母音の発音における日本語と英語の違い

次に、日本語の母音と英語の母音を個々に比較してみると、その音質にかなりな違いがあることは明らかになっている。しかし、この音質の違いを理解し説明しようとするとは非常に難しい。たとえば、“sit”の[i]の説明でさえ「日本語の「イ」と「エ」の中間の舌の位置で言い、舌の緊張をややゆるめて言います」<sup>(1)</sup>となる。この説明はとても適切な説明であり、その通りだと思われる。しかし、日本人が実際にこのように発音しようとするのは難しい。なぜなら、日本語の母音は舌を器用に動かす（緊張させる）ことにより調音しているからであり、「舌の緊張をややゆるめる」というのは不自然な発音であり、日本語ならば滑舌が悪いと判断されるであろう。

この両言語の母音の質の違いを根本的に理解するには、腹筋の緊張による息の吐き出しを必要とする母音発音方法と声門閉鎖音を必要とする母音発音方法との違いを再考することで理解が得られるように思われる。それは、どこを意識して動かすか、という意識する対象の違いともいえる。

英語で腹筋を意識して呼吸を強く吐き出す発音は、結果的に舌を器用に動かす調音方法をとらず、唇と下アゴを動かす調音方法をとった。だから、英語の母音の発音は、腹筋、唇、下アゴを意識して動かす発音になった。ゆえに、舌を動かす意識はきわめて弱く、「舌の緊張をゆるめる」という現象は「意識してゆるめるのではなく」「自然とゆるんでいる」のである。この「舌の緊張がゆるんでいる」という現象は、腹筋と唇と下アゴに意識が集中するので、声門を瞬時に動かす意識が生じなかった結果なのであろうと推測できる。

日本語の母音の調音方法は、舌と声門を動かすことにより個々の母音の違いを出している。舌と声門を瞬時に動かし続けなければ滑舌の良い母音の発音はできない。意識は、舌と声門を動かすことに集中するので、とても腹筋だの唇だのを動かす余裕はない。舞台俳優やアナウンサーならば、腹式呼吸や唇の動きも意識した日本語の発音を訓練されるであろうが、自然な日本語にはその必要がない。

以上、英語と日本語の母音の音質の違いについて考察してきた。ちなみに、舌を動かさないで（緊張させないで）「イ」「エ」「ア」というと「イ」と「エ」の中間や「エ」と「ア」の中間と判断される母音を発音することができる。このように、その音質の違いを、意識して動かす部分の違いによって理解しようと試みた。

---

<sup>1</sup> 島岡丘、『教室の英語音声学』, 研究社, 1986, p. 25.

この章では、日本人には不自然な英語のリズムについて考察した。以上の考察で提案したいことは、以下の点である。

- (1) アクセントのある母音を腹筋に力を入れて大きな声で発音する。
- (2) 息を吸う時は腹筋の力を緩めて（お腹を膨らませるように）息を吸う。
- (3) 単語の最後の子音で息を止め、発音を終わらせる。
- (4) 母音の発音は、唇の形、下アゴの動き、腹筋の動きを意識し、舌を緊張させない。

以上の点に注意して英語の発音を指導することは、ネイティブでなくても指導できる。中学校での英語教育で日本人の教師により生徒に英語のリズムを習得させることができると思われる。

## 第2章 英語のイントネーションについて

「イントネーションは大切であると指摘はされながらも、そのパターンについては、疑問文の場合に文尾をあげること、Wh-questionは例外であること、それにコンマの前の処理など以外はほとんど指導されていない」<sup>(2)</sup>

日本人英語の不自然さの第一位はイントネーションであるとの指摘を上記の研究書で知ったとき、筆者は疑問の大海に放り出された。結局、イントネーションは日本人にとって未だに未知の現象なのだと理解し、これを何とか解明したいと思った。その結果、1996年に『英詩朗読の研究』という形でまとめ出版した。この章では、日本人にとって英語のイントネーションがなぜ不自然であるのかを理解し、どうすればイントネーションが身に付くかという指導方法について考察していく。

### 2.1 イントネーションの定義

イントネーションとはどのような現象か？その定義は明確になっている。「文全体に及ぶピッチの変動をイントネーション (intonation) と呼ぶ」<sup>(3)</sup> という説明が一例である。それでは、ピッチ (pitch) とは何か？ピッチとは「音の高さ」のことであり、

---

<sup>2</sup> 竹蓋幸生、『日本人英語の科学』, 研究社, 1982, p. 69.

<sup>3</sup> 竹林滋、『英語音声学入門』, 大修館, 1982, p. 153.

ピッチの変動とは音の高さが変化することである。ピッチの変動については、基本的に2種類あり、高い音から低い音へ変化する場合を「下降調」、低い音から高い音に変化する場合を「上昇調」と呼んでいる。ゆえに、イントネーションとは、英文に下降調や上昇調の変化を付けることである。これを日本語では抑揚を付けるといっている。

## 2.2 イントネーション・ランゲージ

世界の言語は、様々にピッチの変動を利用している。一つの単語に数種類のピッチの変動を加え、違った意味を表わす特徴をもつ言語を「音調言語 (tone language)」と呼んで分類する。中国語がその例である。しかるに、英語はイントネーション・ランゲージ (intonation language) に分類されており、ヨーロッパの言語のほとんどがイントネーション・ランゲージとして分類されている。

イントネーション・ランゲージの定義をもう少し明確にするために以下の引用を見よう。

Languages that use pitch syntactically — for example, to change a sentence from a statement to a question — or in which the changing pitch of a whole sentence is otherwise important to the meaning are called **intonation languages**.<sup>(4)</sup>

上記の説明では、ピッチの変動を文に加えることが「平叙文を疑問文に変える」働きをしたり、「別の意味を示唆する点で重要」な機能を有する言語をイントネーション・ランゲージと定義している。

つまり、英語でいうイントネーションとは文を対象にしている点で中国語の声調（トーン）とは違うのである。

## 2.3 下降調のイントネーション

英文にはイントネーションが付く。日本人の英語にも確かにイントネーションは付く。中学校で指導されたからだ。“Student” に上昇調のイントネーションを付ければ、「生徒（学生）なの？」という疑問になることは理解している。しかし、イントネーションの理解はそれだけでは不十分であった。我々は、下降調のイントネーションに関して何

---

<sup>4</sup> Victoria Fromkin, Robert Rodman, *An Introduction to Language*, fourth edition, Holt, Rinehart and Winston, 1988, p. 91.

も指導を受けなかったのではないだろうか。なぜなら、下降調のイントネーションという現象は日本語には不自然であり、違和感があり、日本人の脳は下降調のイントネーションを受け入れにくいからだ。

“Tokyo”を英語で発音するとき、おそらく誰もが“To”を高い音で、“kyo”を低い音で発音し、高低の差をつけるであろう。つまり単語にピッチの変化を付けているのである。この高い音から低い音へ変化するピッチの変動を下降調のイントネーションという。音の変化は文字で表現しにくい、イメージ的に表わすなら「ピー・ヒャラ」という変化である。ところが共通語としての日本語は「ドン・ドン」という調子で「東京」と発音する。日本人の脳にはこれが自然なのであって、「ピー・ヒャラ」は不自然なのである。逆も言える、ネイティブの脳には「ピー・ヒャラ」が自然なのであって、「ドン・ドン」は不自然なのである。彼らにとって「ドン・ドン」はリズムなのである。

学生時代に変な経験をしたことがある。FENを聞いていたら、米兵向けの日本語講座を放送していた。その時の表現は、「おはようございます」だった。ところがネイティブのその発音はひどいものだった。「ピー・ヒャラ・ラ」という感じで“Ohayo” “gozai” “masu”と発音していた。そんな日本語ではない。日本語では「だだだだだだだ」という感じで発音しなければいけない。笑ってしまった。ところが、その時、ふと疑問に思った。ネイティブはなぜ「だだだだだだだ」と発音できないのだろうか。なぜ「ピー・ヒャラ・ラ」と発音してしまうのだろうか。そこで、“Good morning”を「ピー・ヒャラ・ラ」という感じで発音してみた。不思議なことに今まで謎であった異文化の世界が開けたように感じた。それ以来、「ピー・ヒャラ・ラ」との格闘が始まり、下降調のイントネーションという意味が再考され、英語にとって極めて重要な現象と気がつくことになったのである。

### 2.3.2 イントネーション・パターン

いろいろ調べてみると、イントネーション・パターンという課題で研究されていることが理解できた。一番理解しやすかった解説書は、W. Stannard Allen著、*Living English Speech*であった。日本人の研究書では、渡辺和幸著、『現代英語のイントネーション』が詳細に解説している。

Stannard Allenは、英文のイントネーション・パターンの基本は以下のようであると解説している。

Broadly speaking, we can classify all the English intonation patterns under two types. Both types normally begin with the first stressed syllable fairly high, and fall step-wise



from stress to stress until the last significant (meaningful) stress is reached. <sup>(5)</sup>

つまり、文の最初の強勢が「かなり高い音」で始まり各強勢ごとに「徐々に音が下がって行き」最後の重要な意味をもつ強勢に至る、のである。渡辺氏の綿密な研究結果においても、文末核音調（文の最後の強勢に付加されるイントネーション）は下降調が一般的であり、非文末核音調（文の最後の強勢以外の強勢に付加されるイントネーション）も予想に反して、「まず下降調、上昇調、下降・上昇調（非分離型と分離型）の主要な基本的音調が中心に使用されている」<sup>(6)</sup>という結果になり、下降調が文全体に使用されていることが理解できた。

アメリカでアナウンサーの指導に携わっているDavid Stern博士の*Breaking the Accent Barrier*というビデオ教材でもStannard Allenと同じイントネーション・パターンの指導をしている。すなわち、文の最初の強勢がかなり高い音で始まり各強勢ごとに徐々に音が下がって行き最後の重要な意味をもつ強勢に至る、と指導している。この下降調のパターンは、「平坦調」と呼ばれているので日本人は「リズム」と勘違いしやすいが、名前は平坦調であっても実際は下降調なのである。

このように、日本人の脳には未知の現象である下降調のイントネーションこそ英語では自然な現象なのである。

## 2.4 イントネーションの文法的機能

下降調のイントネーションはなぜ英語に必要なのであろうか。次は、この疑問について議論したい。

ここで重要な概念は、音調群という用語である。この用語を理解するために以下の説明を見てみよう。

In English, information structure is expressed by intonation. (Halliday 1970b:162) <sup>(7)</sup>

Units of information may or may not coincide with grammatical clauses. <sup>(8)</sup>

According to Halliday, it is through tonality, or division into tone groups, that the

---

<sup>5</sup> W. Stannard Allen, *Living English Speech*, Longman, 1954, p. 39.

<sup>6</sup> 渡辺和幸, 『現代英語のイントネーション』, 研究社, 1980, p. 139.

<sup>7</sup> Elizabeth Couper-Kuhlen, *An Introduction to English Prosody*, Arnold, 1986, p. 121.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 121.

chunking of sentences and texts is achieved. That is, one information unit is realized as one tone-unit. It follows that the more information units there are, the more tone-units there are, and vice versa. <sup>(9)</sup>

上記の説明によると、イントネーションに情報構造を伝える機能があり、情報の単位は文法上の節と一致することもある。また、文や文章を一つの固まりに結合するのは音調性、つまり、音調群に分けることなのである。一つの情報単位は一つの音調単位で表わされる。

上記の説明で理解できることは、話し言葉ではイントネーションが句読点のような働きをして、ある意味を伝える語句を区切っているということである。イントネーションがなければ、音声だけがたよりの会話では文と文、節と節を区切る手段がないということであろう。この区切る機能は、下降調のイントネーションであり、高い音から低い音に下がることにより、区切りが判別できると理解できる。

それでは、一文の中のイントネーションの変動はどうかというと、平坦音調（初めの強勢が一番高い音で発せられ強勢ごとに徐々に低くなっていく）を基本とするものの、文中で高い音で始まる新たな下降調が挿入されることに渡辺氏は注目している。つまり、文の中でもある種の区切りをつけるため幾つかの下降調を用いていることが理解できる。以下の例文に関する渡辺氏の分析を見てみよう。

The Prime Minister of India, Mrs. Gandhi, has now explained why her Government has decided to nationalize fourteen of India's biggest commercial banks. <sup>(10)</sup>

ここで渡辺氏が使用したイントネーションの分類記号をそのまま標記するのは難しいので、下降調と認められる部分で区切ってみると以下のようになる。

(The Prime Minister of India, Mrs.) Gandhi, has (now explained) (why her Government has decided to nationalize) (fourteen of India's biggest commercial) (banks).

上記のように、一文の中に下降調の波が5回続いていることが分かる。ちなみに、“Gandhi”は上昇調になっている。これを文法の語順という観点から見ると以下の

---

<sup>9</sup> Elizabeth Couper-kuhlen, *op.cit.*, p.122.

<sup>10</sup> 渡辺和幸, *op.cit.*, pp. 142-143.

ようになっている。

(主語) (動詞) (目的節の主語と動詞) (目的節の目的語の修飾語) (目的節の目的語)

もう一例見てみよう。

The Soviet Ambassador has been to the Foreign Office for the fourth time this week to talk about Mr. Gerald Brooke. <sup>(11)</sup>

上記の例では、下降調と上昇調が一つの単位となって以下のように文を区切っている。

The [Soviet Ambassador] has been to the [Foreign Office] for the [fourth time this week] to (talk about Mr. Gerald Brooke).

[Soviet Ambassador] [Foreign Office] [fourth time this week]が下降調と上昇調の組み合わせであり、(talk about Mr. Gerald Brooke)は下降調の語句である。ここで、“has been to”について検討してみると、前の“Ambassador”が上昇調なので“has been to”は高い音で始められると推測されるが、いづれにせよ“Ambassador”が上昇調により“has been to”と区切られていることは明白である。これを文法の語順という観点から見ると以下のように整理される。

(主語) (動詞句) (副詞句) (不定詞を用いた副詞句)

以上の考察で理解できることは、下降調のイントネーションには、文法上の語順、つまり文の要素及び修飾語句を区切る機能があるということである。

#### 2.4.2 膠着語とイントネーション・ランゲージの本質的違い

この点を日本語と比較してみると、日本語には英語における下降調のイントネーションは必要ない。なぜなら、主語や目的語や動詞を区切るのは付属語(助詞)だからである。このような付属語を使って文の要素を区切る言語を膠着語と呼んで分類している。つまり、日本語は膠着語なのであり、英語はイントネーション・ランゲージなのである。

---

<sup>11</sup> 渡辺和幸, *op.cit.*, p. 143.

日本人は、「は」「が」「を」「に」「へ」「で」などを使い、主語や目的語や副詞句などを分けて一つの意味をなす情報単位を伝えているのである。だから、下降調のイントネーションは不必要であるし、日本人の脳は下降調のイントネーション（高音で始まり徐々に低くなっていく音声パターン）を使う学習をしていないのである。しかし、上昇調のイントネーションは日本語でも使うので認識できる。ここで次のように推論できる。日本人の脳は英語の下降調のイントネーションを聞き分けられず、ゆえに、日本人の英語学習ではリスニングをしても文法構造を理解できない。つまり、主語、動詞、目的語、補語や副詞句が聞いただけでは区別できず、日本語に翻訳するという作業を必要とするのである。

## 2.5 中学校でのイントネーション教育に関する提案

以上の考察をふまえ、以下に中学校での英語教育に関する提案をしてみたい。

中学生は英語を研究するのではなく習うことが目的である。だから、教師が実践してイントネーションを指導する必要がある。研究書では様々な記号を用いてイントネーション・パターンを視覚的に表現しているが、それは研究のレベルなのであって、学習のレベルではない。もっと聴覚的に理解しやすい方法で指導したいものである。一つの提案は、下降調のイントネーションを「ピー・ヒャラ」という祭りばやしの笛の音声イメージで表現することである。文の最後は、終了を表わす下降調のイントネーションになるので「ピー・ヒャラ・ラ」と最後に「ラ」をプラスする。すると、一文における下降調のイントネーションの波は、「ピー・ヒャラ（主語）」「ピー・ヒャラ（動詞句）」「ピー・ヒャラ・ラ（副詞句）」というような音声のパターンになる。この場合、「ピー」は高音、「ヒャラ」は中音、「ラ」は低音を表現できる。中音の「ヒャラ」は文が終了しておらず、次の「ピー」に連結されると疑問を表わすことができる。この抑揚の波を使って、基本的な語順を区切ること慣れさせるのである。以下の例文は、*Sunshine English Course 1*（開隆堂, 1992）からの引用である。

What's | this?

ピー | ヒャラ

It's | a pumpkin.

ピ | ピヒャララ

It's | a big pumpkin.

ピ | ピーヒャララ

Look at the beautiful lanterns!

ピー ヒヤラ ラ

They're | my friends, | John and George.

ピー | ピーヒヤラ | ピー ヒヤララ

Let's | go to New York | some day.

ピ | ピー ヒヤ ラ | ピーヒヤララ

English | was quite strange | to Hikoza.

ピヒヤラ | ピ ピー ヒヤラ | ピヒヤララ

An officer | wrote something | in a notebook.

ピヒヤラ | ピー ヒヤ ラ | ピーヒヤララ

One day | an American | talked to Hikoza.

ピーヒヤラ | ピーヒヤラ | ピー ヒヤララ

さて、イントネーション・パターンには疑問を表わす上昇調もある。上昇調はいかに表現すべきであろうか。祭りばやしの笛で表現するなら、「ピーヒヤラ・ピー」となるであろうか。もちろん、この場合も、「ヒヤラ」が中音で「ピー」が高音になる。

Is | this | a cap?

ピ | ピ | ヒヤラピー

Do you | speak Japanese?

ピー | ピーヒヤラピー

Do you | clean this room | every day?

ピー | ピー ヒヤラ | ヒヤラ ピ

Did you | cook dinner | yesterday?

ピー | ピーヒヤラ | ヒヤラピ

Do you | listen to the radio | at home | every day?

ピー | ピー ヒヤラ | ピヒヤラ | ヒヤラ ピ

Did you | like the Japanese food?

ピー | ピー ヒヤラ ピー

上記の提案は一工夫にすぎない。祭りばやしの笛の音色のように、日本人が感覚的に

理解できる工夫が必要ではないかというのが筆者の主張である。

この章では、英語のイントネーションについて考察してきた。膠着語である日本語とイントネーション・ランゲージである英語を比較してみると、言語活動が成立する簡単な原理が理解できるように思われる。それは、「疑問+解答」という簡単なパターンの脳内活動である。日本語では、「は」や「を」を単語の後に付けることにより心理的「疑問」のスイッチが入り、心は必ず「解答」を欲求する。そして「解答」を与えられた時、心は「あっ、そうか」と納得し精神的に安定するのであろう。しかし、英語には助詞がない。だからこそ、イントネーションで、つまり音の高い低いで「疑問+解答」のパターンを実行しているのではないだろうか。高い音で心理的「疑問」のスイッチが入ると、心は必ず「解答」を欲求する。そして低音で「解答」を与えられた時、心は「あっ、そうか」と納得し精神的に安定するのではないだろうか。だとすれば、英語はイントネーションで考えているのであり、単に感情を表現するだけの機能ではないと推測される。厳密に言えば、イントネーションを学習しなければ、英語で考えることは不可能なのではないだろうか。だから、結果として、イントネーションを学習しない英語教育が英語の苦手な日本人を輩出してきてしまったと思われるのである。

この章の最後に問題をまとめておきたい。

- (1) この章では、特に下降調のイントネーションについて考察した。
- (2) 下降調と次の下降調の間のピッチの変動が語句と語句を区切る役割をしている可能性に触れた。
- (3) 下降調のイントネーションを義務教育の段階でも理解できるように、「ピー」「ヒャラ」「ラ」という祭りばやしの笛の音色で指導することを提案した。
- (4) 膠着語とイントネーション・ランゲージにおける言語活動のちがいについて考察した。

## 結論

大学で三十年以上英語教育に携わってきて、筆者は、中学生にこそ相応しいような英語教育を未だに実践している。そして、それが大学生から高く評価されている。何かが可笑しい。何かを変えたいという思いからこの論の執筆に至った。

この論は、書店で売られている「こうすれば英語がしゃべれる」的な主張ではなく、誰でもが一般的に理解できるような科学的考察を行ったつもりである。ゆえに、読者は

英語教育の専門家ばかりでなく学生たちも含まれることであろう。

この論では、「日本人の英語はなぜネイティブに通じないのか？」という疑問を解明するため、英語の発音という現象をなるべく科学的に考察し、改善のための提案を試みた。第1章では、英語のリズムについて考察した。なぜ英語にはリズムという現象が存在するのか、どうすればリズムを習得できるようになるのか、について考察した。第2章では、英語のイントネーションを取り上げた。英語は、イントネーション・ランゲージ (Intonation language) に分類されている。ヨーロッパの言語は、ほとんどイントネーション・ランゲージに分類されている。ここでは、特に下降調のイントネーションについて考察し、日本語のような膠着語には一般的にみられない現象として理解した。また、その文法的機能を理解すれば、なぜ英語にはイントネーションが必要なのかという疑問に対し、一解答を提案できたと思われる。

以上、この論の議論を通して考察し提案された英語の発音教育が義務教育である中学校の英語学習に実験的にでも実践され、試行錯誤しながらも徐々に英語教育が変化することを願っている。

最後に私事を述べさせていただければ、筆者の専門はイギリス文学である。イギリス文学は、その背景となるイギリスの歴史と文化の大きな変化の中で過去に誕生し、現在も生まれ続けている。そして、この現象は人間が生きている限り絶え間なく続く現象といえよう。筆者は、日本人として自国の歴史と文化、そしてそれらから発生する日本文学を相対的にみる視点を培うためにもイギリス文学の研究が軽視されるべきではないと考える。日英の文化という観点から比較すると、日本の歴史と文化はイギリスの歴史と文化と比較し理解する時、よりよく理解できる可能性が高くなる。

大学は、このような研究を学生たちとともに楽しむ高等教育の場なのであって、中等教育で本来行ってほしい英語の発音指導をするための場ではないと思われる。

(非常勤講師)